

研究報告

戦前・戦中期にみる聖路加と日本赤十字社の公衆衛生看護とその実践—児童・妊産婦保護活動を中心に

鶴若 麻理¹⁾ 渡部 尚子¹⁾ 吉川 龍子²⁾ 新沼 久美³⁾ 藪 純夫³⁾ 松本 直子³⁾

Public Health Nursing and its Implementation by St. Luke's International Hospital and the Japanese Red Cross Society Prior to and During World War II : a Focus on Activities to Protect Children and Pregnant and Parturient Women

Mari TSURUWAKA, PhD¹⁾ Hisako WATANABE, RN¹⁾ Ryuko YOSHIKAWA²⁾
Kumi NIINUMA³⁾ Sumio YABU³⁾ Naoko MATSUMOTO³⁾

[Abstract]

This paper is intended to shed light on the characteristics of public health nursing, particularly activities to protect children and pregnant women, and the public health nurses who provided this nursing at St. Luke's International Hospital and the Japanese Red Cross Society prior to and during World War II. The issues featured in the previous edition (Bulletin of St. Luke's International University, Vol. 2, 2016) were used as a reference. Both these institutions have recognized the importance of protecting children and pregnant women since the Taisho period and sowed the first seeds in this field by conducting business and activities before the national government embarked on the same endeavor. Public health nursing activities at St. Luke's began at the request of Tokyo City and provided an opportunity for the organization and systematization of public health activities at medical institutions. This led to the spread of public health nursing activities to specialized public health nursing education and government institutions. Meanwhile, the Red Cross began a grant program to prevent tuberculosis following a resolution at the International Conference of the Red Cross. This allowed the Kyoto Chapter of the Red Cross to promptly commence care for the frail child populations. Thereafter, protection for pregnant and parturient women and children was offered at various chapters of the Red Cross and soon spread nationwide. Activities by local chapters of the Red Cross were even seen before the activities of the central headquarters, which resulted in the introduction of social nursing education. Among the former members of both institutions are people who have made substantial contributions to public health nursing activities and education programs both in mainland Japan and in overseas Japanese territories. Due to the demand for public health nursing, practical activities were developed before education programs. Findings suggest that, after a few years, both institutions developed educational programs specializing in public health nursing, which paved the way for more educational endeavors in this field.

[Key words] St. Luke's International Hospital and St. Luke's College of Nursing, the Japanese Red Cross Society, public health nursing, activities to protect children and pregnant and parturient women, public health nurse

-
- 1) 聖路加国際大学・St. Luke's International University
2) 元日本赤十字看護大学図書館・Former The Japanese Red Cross College of Nursing Library
3) 聖路加国際大学学術情報センター・大学史編纂・資料室・St. Luke's International University, Center for Academic Resources, Archives

〔要旨〕

本稿の目的は、前巻（聖路加国際大学紀要、Vol.2、2016年）での課題をふまえ、聖路加と日本赤十字社の戦前・戦中期にみる公衆衛生看護の実践、特に児童・妊産婦保護活動と、その実践に携わった公衆衛生看護婦に焦点をあてその特徴を明らかにすることである。両者とも、大正期から児童や妊産婦の保護が重要との認識に立ち、国が着手する前より事業や活動を行い、この分野における端緒を開いた。聖路加の公衆衛生看護活動は東京市からの要請に始まり、それを契機に医療機関における公衆衛生活動を組織・体系化し、専門的な公衆衛生看護教育と行政機関における公衆衛生看護活動の基盤形成及び拡大へと繋がった。

一方、日赤は赤十字国際会議の決議に基づき、結核予防助成事業を開始し、そのような中で京都支部が虚弱児童の集団養護にいち早く着手した。その後、様々な支部で妊産婦・児童保護が行われ、全国へと拡大した。地方支部活動は中央本部の活動以前に見られ、こうした背景から中央本部で社会看護婦教育が開始された。

聖路加と日赤の出身者の中には、日本（本土）のみならず海外（日本統治地域）において公衆衛生看護活動や教育に多大な貢献をした人もいた。公衆衛生看護の需要から実践活動が先行するが、数年後には両者とも公衆衛生看護に特化した教育課程を開設し、これらは先駆的な教育であったことが示唆された。

〔キーワード〕 聖路加、日赤、公衆衛生看護、児童・妊産婦保護活動、公衆衛生看護婦

I. はじめに

筆者らは「戦前・戦中期にみる聖路加と日本赤十字社の公衆衛生看護とその教育の特徴」（聖路加国際大学紀要2016年 Vol. 2, p. 1 - 9）において、日本の公衆衛生看護教育のパイオニアである聖路加と日赤の教育の歴史の一部を明らかにし、共通点や相違点について検討した。両者には1927年頃より教育機関上層部でつながりがあり、日赤卒業生14名が聖路加の公衆衛生看護部で働き、公衆衛生を仲立ちとして両者は互いに連携・協力関係にあった¹⁾。

そこで課題となったのは、戦前・戦中期にその後の萌芽となるような公衆衛生看護活動、そして両者の教育を受けた人々の実践活動の実際であった。なお、本稿では、聖路加国際病院、聖路加女子専門学校（興健女子専門学校を含む）をあわせて聖路加と表現し、日本赤十字社は全国都道府県の支部と本社の統合体として使用する。

公衆衛生分野の重要課題といえば、母子や高齢者の保健、学校保健、生活習慣病対策、感染症予防など多岐にわたる。国民の健康を保持増進するためには、まずは疾病に対する予防医療が重要である。中でも妊産婦や児童の保護活動は国民の健康を守る根本となる。なぜなら、母親の健康は子供や家族の健康に影響し、幼い頃の健康や健康習慣は、その後のその人の人生の健康に影響するからである。日本赤十字社（以下、日赤とする）は、1928年に「社会看護婦養成規則」を制定し、いち早く公衆衛生看護分野の教育課程を始めた。聖路加も1930年に聖路加女子専門学校に研究科を設置し、わが国の公衆衛生看護教育をリードしてきた。その両者が歴史的にみて、妊

産婦と児童の公衆衛生看護活動として、いかなる活動を行ってきたかを振り返ることは意義があろう。

II. 目的

本稿の目的は、日本の公衆衛生看護の教育のパイオニアである聖路加と日赤の戦前・戦中期にみる公衆衛生看護の実践、特に児童・妊産婦保護活動と、その実践に携わった公衆衛生看護婦に焦点をあてその特徴を明らかにすることである。

III. 方法および倫理的配慮

『日本赤十字社社史稿（第4巻）』『日本赤十字社社史続稿下巻』『日本赤十字社京都支部沿革誌』『静岡県看護三十年史』『聖路加国際病院史』『聖路加国際病院月報』『聖路加メディカルセンター児童保健指導所事業案内』など可能な限り一次資料を依拠資料とした。引用史料において、本文は史料のまま引用し出典を明記した。

IV. 結果

1. 戦前・戦中期のわが国の公衆衛生状態

わが国の戦前・戦中期における公衆衛生の課題は、国際的にみて、結核死亡率や乳児死亡率がいずれも欧州列強と比べて高いことであった²⁾。特に結核は深刻な問題であった³⁾。結核死亡率のピークは1909年と1918年にみられ、その後減少するが、昭和期始めより再び上昇し、戦争の激化と共に高まった⁴⁾。この状況は大正から昭和



写真1 夏季保養所 楽しい食事（『日本赤十字社史稿』第4巻 口絵より）

20年代前半まで続くが、そのような中で1919年（大正8）には結核予防法が制定された。結核予防には健康相談所が必要であったが、わが国では健康相談事業はなかなか発展しなかった³⁾。こうした背景から、政府の保健政策は主として結核予防と母子保健に据えられた。

2. 戦前・戦中期にみる公衆衛生看護の実践

1) 日赤の場合

日赤では、1913年6月に本社が「結核予防撲滅準則」を制定している⁵⁾。これは、1907年にロンドンで開かれた赤十字国際会議の「各国赤十字社は平時において結核撲滅に従事……」とある決議に基づき制定されたものである⁶⁾。このように日赤では国際的見地からの社会的影響を受け、次のような結核予防事業を展開していった。そのような中、まず1914年に京都支部では結核予防の助成事業の一つとして、小学児童の虚弱児50余人を選び、夏季休暇を利用し「夏季児童保養所」を設け、児童養護を行った。これは赤十字におけるこの事業の最初であると共に、わが国の集団養護のはじめであったと言われている^{7) 8)}（写真1）。翌年1915年には東京支部でも「夏季児童保養所」ができていた⁷⁾。1917年には、三重支部で「夏季児童保養所⁹⁾」、1920年には、島根・岡山支部⁹⁾、1921年4月には京都支部・和歌山・愛媛支部において「妊産婦保護所」¹⁰⁾、同年7月には長野支部病院に「児童健康相談所」を開設¹¹⁾した。1922年5月には、本社の産院を開設、産院規則により「乳児保育相談所」を開設¹²⁾している。また「少年赤十字事業ニ関スル講習実施要領（1922年5月26日）」をつくり、本社は支部に対し小学校教員のための少年赤十字事業に関する児童養護講習会を開催した。講習科目として、衛生学や救急法などを教えていた¹³⁾。1923年には、関東大震災被災者救護のため、「臨時乳

児院・臨時児童収容所」を開設¹⁴⁾している。1934年には、岩手支部病院に「乳幼児保育所」を開設しているが、これはのちの「日赤岩手乳児院」で、日赤初の乳児院であった¹⁵⁾。

2) 聖路加の場合

聖路加では、外国人宣教師の出身国の米国をはじめとして、健康増進や感染症及び疾病予防といった公衆衛生活動が重視され、また1925年に開催されたICNヘルシンキ大会の専門的討論においても、公衆衛生が主要なテーマの一つとなった^{16) 17)}。聖路加の公衆衛生及び公衆衛生看護活動は、1920年初頭、下記にみる東京市の児童健康相談事業との協力を始まる。東京市市長の後藤新平は、わが国の乳幼児死亡率が高いことを憂い、一方、聖路加のルドルフ・トイスラー院長も公衆衛生や予防医学に基づく実践活動がわが国に必要と考えており、両者の方向性が一致し、そこで1922年に、後藤はトイスラーに児童相談所の開設について相談¹⁾をした。こういった経緯で、1923年8月に東京市妊産婦並びに児童健康相談所が開設され、深川富川町、浅草の玉姫町、聖路加本院の3カ所で診療を開始した^{18) 19) 20)}。この相談所は健康な妊婦や児童のためのものであり、当時の人々にとって、積極的に相談に訪れる人は少なかったため、牛乳配給所も併設したところ多くの人が相談所におとずれた^{18) 19) 20)}（写真2、3）。

しかし1923年9月に関東大震災がおり、児童健康相談所を閉じることを余儀なくされた。その後、聖路加では1926年には乳幼児の健康を保つ目的でウェルベビークリニック（Well Baby Clinic）を開始し、1928年に病院に「公衆衛生保健部」を設立し、同年本院内に「小児健康相談所」を創設した²¹⁾。1933年には、皇太子殿下御誕生記念として「児童保健指導所」を開設した^{22) 23)}。当時使用



写真2 1923年 東京市の依頼により開設された児童健康相談所・牛乳配給所



写真3 1923年 東京市の依頼により開設された児童健康相談所・牛乳配給所に並ぶ人々

聖路加国際メディカルセンター
児童保健指導所事業案内

住所 京橋区明石町三十七番路加病院舊館
電話(56)六〇一―八(院内九六)

一、児童健康相談
お子様の健康発育に就て、又栄養及び育児上の問題について御相談致して居ります

◇向種痘注射御希望の方は一時より二時の間に御来所下さい

会費	日時	指導者
定	毎週火曜全午後一時より	森 宜子
代	方	藤 かみ

二、料理講習
経済的で然も栄養価の多い一般家族のための料理講習を聞いて居ります

会費	日時	指導者
定	毎週土曜全午前九時半より	藤 かみ
代	方	藤 かみ

三、妊婦相談
妊娠中の攝生並に育児法やお産のために準備すべき品について御相談に預つて居ります

会費	日時	指導者
定	毎週木曜全午後一時より	藤 かみ
代	方	藤 かみ

四、簡単ベビー服一式講習
衛生的で手軽に御家庭でお作りになれる赤ちゃん服を研究して居ります

会費	日時	指導者
定	毎週木曜全午後四時より	平野 みどり
代	方	平野 みどり

五、家庭訪問
指導所に御来所なさる御子方様の御家庭を訪問して實際に育児、栄養の御相談に預つて居ります
尚其の他健康に関する御相談でしたら御来所下さるなり又御希望によつては家庭訪問を致します
事務所の相談時間は午前九時より午後四時まで致します
(但し日曜・祭日・休)

場所 聖路加国際メディカルセンター
児童保健指導所

聖路加国際メディカルセンター
児童保健指導所事業案内 (1933年頃)

写真4 聖路加国際メディカルセンター・児童保健指導所事業案内 (1933年頃)

されていた「児童保健指導所」パンフレット(写真4)をみると、児童健康相談(児童の健康発育、栄養及び育児上の問題についての相談)、料理講習(経済的で栄養価の高い一般家族のための講習)、妊婦相談(妊娠中の攝生並びに育児法やお産の準備品の相談)、簡単ベビー服一式講習(衛生的で手軽に家庭でつくるベビー服)、家庭訪問(指導所に相談にきた家庭を訪問し実際の育児や栄養の相談にのる)の5つの事業が展開されている²³⁾。1927年、10年近く米国に留学し、ポストンで看護学と公衆衛生看護学を学び、さらに3年の実地家庭看護婦の経験がある平野みどりが聖路加国際病院に入職しているが、この児童保健指導所での妊婦相談、簡単ベビー服一式講習を指

導したのは平野である。これらの相談には、妊婦相談表や愛児の発育表が使用されていた。

3. 聖路加や日赤を卒業し公衆衛生看護活動において耳目を集めた人々

聖路加、日赤共に多くの卒業生をこの分野に輩出している。その中でも特に先駆的な公衆衛生看護活動を展開した人々とその活動の特徴をみていきたい。

1) 日本統治地域での公衆衛生看護実践と教育の普及

1930年代から40年代の終戦まで、日本の統治下にあった外地において本国の公衆衛生看護教育やその実践の種が播かれた。ここでは、共に聖路加女子専門学校研究科

を卒業し、その活動を積極的に担った丸山周子（1936年修了）と秋山外子（1935年修了）を取り上げる。

丸山は、満州での公衆衛生看護活動と開拓地保健婦の養成に専心した。丸山は、日赤長野支部病院救護看護婦養成所を卒業し、聖路加女子専門学校研究科で公衆衛生看護の専門教育を受けた。その後、石川県鹿島郡金丸村役場に保健婦として赴任した。金丸村は北日本特有の気候で、乳幼児死亡率が高かったため、妊娠・出産・育児を一連として考える「愛育班」という組織を構築し、農作業が忙しい時期に「季節保育所」をつくり、妊産婦・児童への支援活動を積極的に行った²⁴⁾。この金丸村での公衆衛生看護実践が後の大連での活動に生かされていった。金丸村での活動を共にしていた金沢大学の村上賢三医師が満州のハルビン医科大学へ赴任することになり、その縁で、1941年に満州ハルビン市立母性小児相談所で健康相談の仕事を行い、村上からの要請により、満州拓殖公社での保健婦養成所開設の準備をし、1942年に満州拓殖公社保健婦養成所教員として保健婦の養成を担った^{25) 26)}。これは満州での最初の保健婦の養成であった。満州での保健婦養成は、1941年の「保健婦規則」にのっとり教育を進めた。暖房や被服の保温対策、日光浴のすすめや住宅の清潔、ハエや蚊の予防に蚊帳の活用、食料品の保存や加工等、寒冷地特有の特徴を踏まえた教育を行っていた²⁴⁾。この保健婦の養成期間は1年間で、第1期生は10名で、2期生は20名であった。その後、1944年には、満州国の国立中央保健婦養成所教員（新京市、現在の長春市）としても活動した²⁴⁾。

秋山外子は、聖路加で公衆衛生看護を専門的に学び、大連や満州での保健婦養成に従事した。1935年に東京市特別衛生地区保健館の保健婦として働き、その経験を生かし、1938年に関東州大連市の関東保健館保健婦長²⁷⁾を務めた。大連では家庭訪問を中心に、保健衛生状態の改良指導を行った。その他、予防接種等、今日の保健所で行われるような仕事をしてきた²⁷⁾。1941年には満州国鞍山市昭和製鋼所にて、職員保健課保健婦長、保健婦養成所講師として教育にも携わった²⁸⁾。昭和製鋼所では診療所はあったが予防課がなく、その任にあたることとなった²⁸⁾。2、3万世帯を抱えて何から手を出してよいやら迷ったが、まず家庭訪問から始め、保健婦の養成や予防衛生の仕事に精を出したという²⁷⁾。

また本稿では取り上げなかったが、聖路加女子専門学校研究科1936年修了の田島基も、台湾で公衆衛生看護及び看護教育に貢献している。

2) 地域住民のための先駆的な実践活動

日赤では、前述のように国際的見地から結核予防という流れの中で、各支部が虚弱児童の夏季保養所をつくり公衆衛生看護実践が展開された。その中で、支部を背景としながらも、これらの活動とは別に、地域住民への巡

回看護を開拓した公衆衛生看護婦がいた。その先駆的な実践者は小山シズと石本茂である。

小山は、生涯にわたり巡回看護婦として公衆衛生看護活動に従事した人である。1926年に日本赤十字社病院救護看護婦養成所を卒業後、日本赤十字社静岡支部看護婦外勤部に勤務した。翌年には静岡市の要請により、市役所の社会課の巡回看護婦となる。生活困窮者の患者家庭を訪問し、生活援助や看護に尽力した。この事業は全国的に評価され、大阪から見学視察に来たほどであったという²⁹⁾。戦時救護への召集まで10年間献身的に活動した。1939年から再び静岡市役所社会課巡回看護婦として勤務し、翌年から静岡支部の巡回看護を担った。巡回看護にあたっては、市立病院の医師と相談の上、実施し、日本中不況のなか、木賃ホテルの乞食の看護、ハンセン病患者の包帯交換、生活困窮者のため、自分の家の米や着物を持ち出し、昼夜を問わず東奔西走したという。また当時の給料は技術者として市長から認められ45円だった（大学卒男性は30円であった）²⁹⁾。

石本茂は1933年に日本赤十字社富山支部病院救護看護婦養成所を卒業し、石川県の小学校で学校看護婦として働き、1934年に日本赤十字社病院の社会看護婦課程で学び、公衆衛生看護の専門教育を受けた。その後は、福井支部で社会看護婦として、健康相談、保育相談、学校での衛生講話などに従事した³⁰⁾。当時のエピソードとして、熱心さのあまり、医師から訪問看護の仕事に横槍が入れられ、福井県医師会総会で説明を求められている。訪問看護婦という名目で患者の家を訪ね歩き、医療問題に対して、出すぎた対応をしたと指摘されたのである。それに対して、不遇の患者と家族に食器の処理法や痰の扱い方を教え、病人の環境づくりを支援し、予防衛生の話をしていると述べた。社会看護婦の使命を果たし、その役割を理解してほしいと訴えた。県の衛生部長が医師会の説得にあたってくれた³⁰⁾。

V. 考 察

本稿では、聖路加と日赤の公衆衛生看護活動、特に妊産婦と児童の保護に関して、その保護活動の経緯や内容を歴史的に検討した。それらをふまえると、以下5点がその特徴として指摘できることが示唆された。

まず、一点目は、聖路加、日赤ともに大正期から児童や妊産婦の保護が重要であるとの認識に立ち、国が着手する前より様々な事業や活動を行いこの分野における端緒を開いた。

二点目は、日赤では、赤十字国際会議の決議を受けて、中央本部は「結核予防撲滅準則」を制定し、各支部へと伝達した。それにいち早く京都支部が呼应し、全国の支部へと拡大していった。これが契機となり、社会看護婦

教育の必要性が高まり、1928年に公衆衛生看護の専門教育が開始された。

三点目は、聖路加の公衆衛生看護活動は1922年の東京市からの要請で始まったが、これを契機にトイスラー院長は医療機関における公衆衛生活動（公衆衛生看護を含む）を組織・体系化（1928年）し、病院内に公衆衛生保健部を創設し、また学校では、専門的な公衆衛生看護教育を担う研究科（1930年）へと繋げた。

四点目は、両校の出身者の中には、日本（本土）のみならず海外（日本統治地域）において公衆衛生看護活動および公衆衛生看護教育において多大な貢献をし、それらの重要性を人々に知らしめた人もいた。

五点目は、日赤・聖路加ともに公衆衛生看護の需要から実践活動が先行するが、続いて看護教育の中に公衆衛生看護関連科目を組み込み、数年後には公衆衛生看護に特化した教育課程（日赤：社会看護婦課程、聖路加：聖路加女子専門学校研究科）を開設している。こうした教育は、当時の他の看護教育機関には見られず、これは他校の同時期のカリキュラム^{31) 32) 33)}と比べてみると先駆的な教育であったことが示唆された。

VI. おわりに

本稿では、聖路加と日赤における公衆衛生看護実践としての、児童・妊産婦の保護活動に焦点をあて、その歴史の史実に基づきその特徴の一端を明らかにした。今後は、公衆衛生看護に関しては、児童・妊産婦保護活動以外にも目を向け、その活動や取り組みを歴史的に明らかにすることも課題である。聖路加や日赤の出身者で公衆衛生看護活動として耳目を集めた人々は多くいるので、さらにその先駆的な活動を掘り起こしていくことが求められよう。

本研究は、日本看護歴史学会第30回学術集会（聖徳大学 2016年8月20日）で発表した内容に修正を加えたものである。

引用文献

- 1) 鶴若麻理, 渡部尚子, 川原由佳里, 吉川龍子, 新沼久美, 内田卿子, 岩間節子, 直井久枝, 大橋明子, 松本直子, 廣瀬清人. 戦前・戦中期にみる聖路加と日本赤十字社の公衆衛生看護とその教育の特徴. 聖路加国際大学紀要. 2016; 2: 1-9.
- 2) 日野秀逸. 保健活動の歩み. 医学書院; 1995. p.198-203.
- 3) 楠本正康. 保健所三十年史. 日本公衆衛生協会; 1971. p.12-37.
- 4) 橋本正巳. 公衆衛生現代史論. 光生館; 1981. p.105

- 107.
- 5) 日本赤十字社編. 日本赤十字社史続稿 下巻 (明治41年~大正11年). 日本赤十字社; 1929. p.958.
- 6) 日本赤十字社編. 日本赤十字社史稿 第4巻 (大正12年~昭和10年). 日本赤十字社; 1987. p.353.
- 7) 日本赤十字社編. 日本赤十字社史稿 第4巻 (大正12年~昭和10年). 日本赤十字社; 1957. p.343, 345.
- 8) 京都支部編. 日本赤十字社京都支部沿革誌. 京都支部; 1931. p.168-169.
- 9) 5) p.960.
- 10) 5) p.946.
- 11) 5) p.958.
- 12) 7) p.339.
- 13) 5) p.963-967.
- 14) 7) p.275.
- 15) 日本赤十字社編. 日本赤十字社年表. 日本赤十字社; 1996. p.51.
- 16) 大橋明子. 聖路加女子専門学校のカリキュラム. 聖路加国際大学学術情報センター・大学史・編纂・資料室編. 聖路加と公衆衛生看護. 聖路加国際大学; 2015. p.22.
- 17) グレイスL.デロウリイ. (千野静香他). 専門職看護の歩み. 日本看護協会出版会; 1979. p.158-159.
- 18) 上野他七郎. 第十二章 本院の事業要綱 四. 児童保健指導所及託児所. 聖路加国際病院史; 1941. p.194.
- 19) 北川千秋. 旧館物語 1. 聖路加弘報 明るい窓. 1975; 19(13): 28.
- 20) 久保徳太郎. 聖路加国際病院の過去現在並に将来. 聖路加国際病院月報. 1928; 下半期号: 6.
- 21) 北川千秋. 聖路加病院と公衆衛生の話. 聖路加弘報 明るい窓. 1978; 22(9): 32.
- 22) 上野他七郎. 聖路加国際病院史 第十二章 本院の事業要綱 四. 児童保健指導所及託児所. 聖路加国際病院史; 1941. p.195.
- 23) 聖路加国際メディカルセンター 児童保健指導所事業案内パンフレットより. 1933年頃.
- 24) 丸山周子. 満州拓殖公社による保健婦の養成と開拓地での保健活動. 菊池頌子・丸山周子・山田光子・佐藤千栄子. 戦時下「満州」(中国東北部)での保健・医療の状況: 満州における保健婦の養成と保健婦の活動. 保健婦資料館; 2014. p.16-17.
- 25) 丸山周子. 満州における保健婦教育. 保健師の歴史研究. 2005; 1. p.1-11.
- 26) 土屋マス. 満州開拓地保健婦養成所に勤務して. 的野義夫編: 満州拓殖公社立開拓地保健婦養成所誌. 松古堂; 1979. p.24-31.
- 27) 秋山外子. 手記「思い出ずるまま」平成22年1月23日.

- 28) 秋山外子. 「私の歩み」回顧録.
- 29) 静岡県看護協会編. 静岡県看護三十年史. 静岡県看護協会；1984. p.17.
- 30) 石本しげる. 紅そめし. 北風書房；1984. p.36.
- 31) 慈恵看護教育百年史編集委員会. 慈恵看護教育百年史. 東京慈恵会；1984. p.85-88.
- 32) 東京大学医学部附属看護学校45周年記念出版委員会編. 看護教育百八年のあゆみ：1887-1995. 東京大学医学部附属看護学校；1995. p.78-81.
- 33) 慶応義塾大学医学部附属厚生女子学院編. 慶応義塾大学医学部附属厚生女子学院六十周年記念誌. 慶応義塾大学医学部附属厚生女子学院；1978.